知的財産事例株式会社丸山製作所

安全に、楽しく、子どもを育む、遊具の未来を開発する

事業内容

1946年、現社長の祖父、丸山清治氏によって創業。住宅・都市整備公団や東京都住宅局の指定工場となり、公園・学校の遊具や公園施設用品を製造。近年は遊具の点検・補修にも力を入れる。社長は社団法人日本公園施設業協会理事であり、遊具の安全基準策定に協力。子どもの知育に貢献する"実験遊具"の開発にも意欲的である。

特許登録番号と内容

| | 意匠登録 | 第 1159495 号 | 滑り台 |
|--|------|-------------|-------|
| | 意匠登録 | 第 1168185 号 | さく |
| | 意匠登録 | 第 1180920 号 | 野外遊戲具 |
| | | | |

ACTIVITIES & ACQUISITION IS INTELLECT (2010年11月現在)



滑り台・ブランコ・砂場が "三種の神器"

「うちは終戦直後から遊具を作り始めましたが、今でも一般的に遊具といえば、滑り台類(立体的空間感覚の養成)・ブランコ類(三半規管の強化)・砂場類(創造性・社会性の育成)が"三種の神器"なんですよ」

株式会社丸山製作所・三代目社長の丸山智正さんはいう。同社は戦後間もなく、創業者である祖父が鉄棒やジャングルジムなどの遊具を作ることからスタートした。戦中の物資供出で材料が不足する中、スクラップ金属などを集めて製造したという。やがて昭和40年代になると、都市のインフラが急速に整備されていく。団地の建設ラッシュが始まり、公園施設の数も急増する。同社は、住宅・都市整備公団や東京都住宅局の指定工場に認定され、順調に遊具を製造・納入していった。

風向きが変わったのは平成に入ってから。規制緩和 により指定工場制度が終了し、バブル崩壊後の不景気 が直撃する。同社も転機を迎えたが、その後、新たな 業務に取り組むことになった。

「その頃、箱型ブランコなど遊具による人身事故が頻 発し、安全基準の策定が急務になっていました。それ まで日本には安全に関するガイドラインは特に定めら れていませんでした。それを、安全性・メンテナンス に関しての規定を明確にすることになったんです」

まず国土交通省が指針・ガイドラインを示し、公園

施設の安全を管理する JPFA (社団法人日本公園施設業協会) が組織された。 JPFA では、公園施設の製品安全管理士・製品整備技士の二つの資格認定制度が設けられた。 同社はこの協会に技術委員として参加。 遊具の安全基準の策定に長らく尽力している。

現在、同社は安全基準を満たす「SP表示認定企業」 に選定され、遊具の製造だけでなく点検・補修業務も 請け負っている。

「ハラハラする体験」が 子どもを育てる

丸山社長は、22年前に同社に入社する以前、自動車の衝突実験など安全性を検証する職場に勤務していたこともある、いわば"安全のプロ"である。

「ところが、最近子どもを見ていると、リスクに対して 無防備な子も目立ちます。たとえば、"高所平気症" の子どもがいます。高層マンションなどで育って高い 所に恐怖感がないんですね。自分の身を守る上では危 険なことだと思います」

ブランコから落ちてころんだ、滑り台でうまく着地できなかったなどの遊具を通じて得た"痛い"体験、そうした体を通じての経験が子どもの危機回避能力を養う。一方、「ハラハラする」楽しみもまた、そこには必要だ。

「危険も、一つの遊びの価値なんです。子どもにとっては危ない遊具の方が断然面白いんですね。遊具を作るとき、そのバランスをどうとるか、難しいですが、

COMPANY DATA

所在地:東京都江東区亀戸 7-5-1

電話番号: 03-3637-4340 **URL:** http://www.k-maru.co.jp/ **設立:** 1961 年 10 月 合資会社丸山製作所設立

1976年10月株式会社丸山製作所設立 資本金:3,000万円

売上高:12 億 5.500 万円(第 34 期) **従業員数:**31 人(2010 年 11 月現在)



遊具の製造は、千葉県白井工場で行われる

やりがいのあるところです」

同社では、ニュータイプの"実験遊具"を作り、保育所などに試験的に置かせてもらっている。たとえば、滑り台を利用する際、簡単に上に登れない遊具。階段がなく、壁をよじ登って初めて滑ることができる。もちろん子どもが壁登りに失敗し、下に落ちても問題がないようにセーフティマットを敷くなど、安全面の配慮は怠りない。

さらに、遊ぶ子どもの層を広げる遊具にも、社長の 構想は広がる。「欧米には、身体障害者用の遊具があ ります。健常者の子どもと一緒になって遊べる遊具を、 日本にもそのうち作りたいですね」

意匠登録で製品の デザインを守る

現在、同社の遊具は、保育所・小学校だけでなく、 六本木ミッドタウンの公園をはじめ全国の公共施設で 活用されている。安全性とともに社長がこだわるのは 遊具のデザインだ。

「うちの製品には色使いにもコンセプトがあります。 "情熱の赤""希望の青"というように、いくつかのテ 子どもたちはコン ビネーション遊具 でイキイキと遊ぶ





子ども (小学生) たちがデザインしたコンビネーション遊具

ーマカラーを決めています」

同社のデザイナーの中には、プロダクト・デザインに携わっていたが、遊具のデザインを希望して入社した者も。製品の中で人気を呼んでいるのは「コンビネーション遊具」だ。滑り台や雲梯(うんてい)など、いくつかの遊具を組み合わせたものだが、赤・青・黄色などビビッドな色使いが印象的だ。

中には、そのデザインも含まれているのではないでしょうか。今後も、それにはこだわっていきたいですね」 同社では、滑り台の仕様など、3つの意匠登録権を 取得している。技術的な特許をとるのは遊具の場合難 しく、むしろ意匠登録によってデザインの類似品をガードしていくという方針だ。

「子どもが思い切り体を動かして遊具で遊んだ記憶の

「当社の売り上げには、税金が使用されている部分も 多い。社会貢献を意識して仕事をしないとと思います。 でも、子どもの未来を育む仕事は楽しいですよ。先代・ 先々代には、いい仕事を残してくれたと感謝しています」

知的財産活用のポイント-

使用者のニーズに合った デザインにこだわる

丸山製作所が製造で最優先するのは、まず「安全性」「品質」。そして、製品のデザインもまた重視している。デザインの全体的なコンセプトは「丸」をモチーフにした「ラウンドデザイン」。オレンジ色なら「太陽の色」というように、カラー・コンセプトにもこだわっている。「うちが作る製品は、公園や学校など、地域に根付いた場所で使用されるものです。

ですから、設置場所や地域のニーズを考え、それに対応した デザインを提案しています」遊具はランドスケープの一部で あり、同時に人々の記憶に残るもの。デザインへのこだわり が強い同社の姿勢には、その強い自覚が貫かれている。